

浜松協働学舎 支える会だより

〒 433-8108 浜松市北区根洗町 681 番地の 5 ☎ 053-430-0596

浜松協働学舎を支える会 代表 小林琴代

2016.12.15

no.59

共生の街 根洗町で



座談会「地域に開かれた福祉をめざして」

根洗作業所 坂中夕也(司会)

社会福祉法人ひかりの園では、相模原障がい者殺傷事件や熊本地震・台風十三号などの災害を踏まえ、地域で支え合って暮らしていくためには社会福祉法人として何をしていくべきなのか、地元根洗町自治会にお集まりいただき、施設職員との座談会を開催しました。

まず、福祉施設の安全をテーマにお話しいただきました。障がい者や高齢者の安全を図ることは施設だけでは難しく、根洗町で法人が運営している福祉施設をまず知っていただき、では、どのような連携ができるか、地域で見守っていただけるためにはどうすればよいのか意見を交換しました。相模原の事件のこともあり、福祉施設の安全については、地域の皆様も大変関心を持っていたいていました。グループホームすてっぷの大橋寮長から「根洗町では大切に見守っていたいただき、これまで嫌な思いをしたことがない。」という思いを伝えると、「普段から障害のある方たちと接する機会があったり、根洗町の中を当たり前に歩いていたりすることが良いのだろう。」(嶋田自治会長)、「地域の学校教育の賜物で、子供たちが福祉に対する関心を高めていくなかで、その親たちも当然のように関心を持つことができる環境が根洗町にはあった。」(高洲女性部長)、「大正時代から人が住み始めた根洗町には、戦後まもなく数多くの病院や施設が作られ、地域の中で弱者を敬う気持ちはそのころから脈々と受け継がれてきた。」(田村顧問)と、根洗町で生活をしている障がいのある方たちを暖かく受け入れてくれている現状を教えてくださいました。

法人では地域交流として焼きもの祭りや各施設の夏祭りなどのイベント、福祉講演会、介護教室を開催していて、どれも関心は持っていたいていのですが、実はそれらのことが「実際には地域の皆様にそれほど知られていないのではないか。」というご指摘もいただきました。法人としては熱心に取り組んでいるつもりでも、地域に充分には浸

透していないということが分かり、これから周知の仕方なども考えていかなければならないと感じました。

浜松協働学舎には入所施設やグループホームがいくつもあります。施設で暮らすご利用者が、地域の一員として安心して堂々と生きていってほしいという施設職員の気持ちを訴えると、自治会長からは、「世の中には障がい者を嫌う人もいるが、それでも共生を目指すべきだ。」と心強い言葉をいただきました。

根洗町はバンク・ミケルセン賞を受賞した北海道の伊達市に匹敵するほどの障害のある方たちが多く暮らしている町ですが、自治会の皆様は「当たり前のことをしているだけなのに。」と驚いた表情を浮かべていました。また民生委員児童委員の荒井様は「普段から施設を訪問するなど障害のあるかたやお年寄りと接する機会が多くありますが、弱者を守るためにはやはりハード面の整備は必要不可欠で、財政的な面は国などが十分な支援を行っていく必要があるのではないか。」と福祉施設の財政状況を踏まえたご意見をいただきました。

次に防災対策および災害時の対応について話題に挙がりました。福祉施設では、災害時に備えて福祉避難所の設営計画や災害時の備蓄等を行っており、災害時には様々な形で地域に貢献できると考えています。地域の防災対策についても情報を教えていただきました。

災害時、福祉施設に専門職がいることは当たり前ですが、実はこの地域にも福祉の専門職や支援のできる人材がいます。普段の勤務先に行くことができ、ない専門職が、地域の避難所で活躍できる仕組みづくりが提案されました。また、東日本大震災の時に活躍したのは地域の中学生で、



根洗町には三方原古戦場があります。古戦場の碑の向かいにはグループホームこもれびがあります。

福祉に理解のある根洗町に住む中学生に期待ができるのではないかと意見も出されました。

実際に地震などの災害が起こったときには、施設は中の対応だけで手いっぱいになってしまうかもしれません。食料や水などの備蓄があることをお伝えし、更に福祉施設ならではの非常食について紹介させていただきました。災害時に様々なところから食料などの支援物資が来ますが、特別食の調達は難しいのが過去の例でした。第三静光園で用意している非常食には、歯がなかったり嚥下の障がいのある人でも食べられるように、お粥やゼリーになっている特別食を用意してあります。普通食をお粥にするためには非常用のガスや電気も不可欠で、浜松協働学舎で用意している発電機やガスコンロなども利用することが、地域の特別な配慮をする方たちへの支援につながると感じました。

防災や災害対策で必要なことは、自助・互助・公助だといわれています。まずは自分で身を守る、次に自助ではできないところは近くの人の力を貸してもらうことが大切であることを共有し、互助のためにこれからできることは何かと考えるきっかけとなりました。

老人会会長からは「皆さんが地域のことを考えていただいている、根洗町にいて本当に安心だなあ。」と、私たちが心から嬉しく感じる言葉をいただきました。福祉施設として地域の皆様にもっともっと知っていただくことで、安心感が増すことに繋がればよいと感じました。

最後に社会福祉法人には地域のニーズに応える新しい福祉活動の取り組みが求められていますが、どのような形で私たちが地域に貢



献できるのか、ご意見をいただきました。困ったときや相談がある場合は福祉のプロにご相談いただき、施設の持ついるさまざまな力を活用していただきたいと施設としては常に考えています。ただ、地域の皆様は「困っていると思っていてもどうすればいいのかわからない。」「交流しあう機会をぜひ考

えていただきたい。」「住民が福祉施設に行つて、ああいう人たちがこういう生活をしているところだと実際に理解しなければ、福祉施設の理解にはならない。」「地域の方たちに施設の案内をしてみたらどうか。」と多くのご意見をいただきました。今回のように地域と施設のやり取りを重ねていくことが、地域の互助につながるのだと思います。十一月に行われた浜松協働学舎の施設防災訓練には早速ご参加をいただきました。今後も地域の皆様との協働の機会が増えることを願っています。



長時間にわたつて有意義なご意見をたくさんいただきました。「共生の街 根洗町」「日本一優しい街 根洗町」の呼び掛けには参加者全員から拍手が沸き起りました。

自治会長さんが共生を求めるとおっしゃいましたが、地域、法人とも力を合わせて共生社会を実現していこうと、同じ方向を向いていることが確かめられたと思っています。

社会福祉法人に勤めるものとして地域の皆様の温かさを感じることで、また課題が山のようにあるということを実感しました。これからも意見を交換できる場を設けていき、地元根洗町の皆様と理解し合い、つながりをさらに深いものにしていきたいと感じています。

今こそ共生社会の実現を！

津久井やまゆり園の事件を考える

社会が傷つけられた事件

七月二十六日に、障害者支援施設「津久井やまゆり園」で入所者十九人が死亡、二十六人が怪我をした障害者殺傷事件では、だれもが言葉にならない大きなショックと不安、深い悲しみを受けた。そして私たちの社会が深く傷つけられた思いがします。

私たち福祉に携わる者は、「障害者はいなくなればいい」という犯行の動機に対しては、真っ向から立ち向かわなければいけないと考えます。

障がい者に対する差別や「障がいがあることは不幸だ」とする考え方は、社会に根強く存在していることは事実です。長年の障がい当事者や家族、関係者の努力により、障がい者差別を解消することを目的とした「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（障害者差別解消法）が大きな期待のもとに本年四月に施行されました。まさに障がい者差別の解消に向かう大きな一歩を踏み出したこの年に、この痛ましい事件が発生しました。私たちは、今こそ「共生する社会の実現」を本気で考えないといけないと思います。



安心して、堂々と生きてください

～共感を呼んだ育成会連合会の声明文

知的障がいのある子どもたちの親たちで組織する「全国手をつなぐ育成会連合会」の会長である久保厚子さんは、「どのような障害があっても一人ひとりの命を大切に、懸命に生きています。事件で無残にも奪われた一つひとつの命は、かけがえのない存在でした。お互いに人格と個性を尊重しながら共生する社会に向けて共に歩んでいただきますよう心よりお願い申し上げます」と訴えました。

そして、障がいのある当事者たちに向けて「障害のある人もない人も、私たちは一人ひとりが大切な存在です。障害があるからといって誰かに傷つけられたりすることはあってはなりません。もし誰かが障害者はいなくなればいいなんて言っても、私たち家族は全力でみなさんのことを守ります。ですから、安心して、堂々と生きてください。」とメッセージを送りました。この言葉に、事件のあと語る言葉を失った私たちは大きな勇気を与えられました。

『この子らを世の光に』

障がい者福祉の父といわれ、戦後の混乱期に障害児施設近江学園を開設した糸賀一雄は、『この子らを世の光を』あててやろうというあわれみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、『この子らを世の光に』である」と、著書『この子らを世の光に（一九六五年）』に記しました。

この子らが世の光である、言葉を発しない重度の知的障がいの人や重症心身障がいの人たちこそが世を照らす光であると書かれたのです。

重度の障がいのある人たちはその存在そのものがいのちであり、最も弱いいのちを守ること、最も弱いと言われる人たちを守るこそが、平和な、人々が支えあう社会を作ることだと糸賀は社会に訴えました。この考え方が福祉の思想だと糸賀は主張しました。

人間の命に「生きる価値のある命」「生きる価値のない命」があるはずがありません。人間のいのちと尊厳の大切さを社会で繰り返し確かめ合うことが大切です。

「私たち家族は全力でみなさんのことを守ります。ですから、安心して、堂々と生きてください。」のメッセージに、私たちも全く同じ気持ちをもって、共生社会の実現に向けて最大限の努力を続けま

す。（文 高木誠一）



「私たちの思い」

（全国手をつなぐ育成会連合会「手をつなぐ」2016年9月号より）

- ・重度の障害をもち、施設に入所している弟まで殺されたような気持ちになり、震えが止まりませんでした。苦しく、つらいときに久保会長の声明文を読み、涙が止まりませんでした。
- ・私の長男も重度で重複障害です。おまけに難病もあります。でも私は、日本一幸せにしてあげたいと思って今まで育ててきました。つらいときもありましたが、あの子の笑顔に支えられてきました。
- ・被害にあわれた方の名前が出ないことに疑問を感じていますが、公表できない事情があるのかもしれませんが、そのことは悲しく思いますが、何より差別が根強い社会を変えていかないと強く思います。
- ・この子がいるから、障がいがあってもこの子がいるから、障がいのあるこの子がいるから私たちは幸せなんだと、言いたいです。
- ・事件は本当に衝撃的で、まだ受け止めきれいていません。私たちがどれだけ子供たちを大切にしているか、社会の中での価値がどこにあるのか、しっかり訴えていきたい、いかなくてもいけないと思います。

細江警察署による不審者対応訓練を実施しました

社会福祉法人ひかりの園では、八月十七日に細江警察署の協力を得て、浜松協働学舎根洗寮を会場に不審者対応訓練を実施しました。訓練には法人内施設五十名の職員が参加しました。

職員があらかじめ緊急時にどのように行動するかという事前の意識化と、普段から訓練を行うことの大切さを実感しました。



平成二十八年年度の社会福祉法人ひかりの園の職員永年勤続表彰において、浜松協働学舎根洗寮の高木誠一寮長が四十年勤続表彰を受賞しました。支える会だより編集委員会から高木寮長に「駆け抜けた四十年」というテーマで原稿を依頼しました。

駆け抜けた四十年

浜松協働学舎根洗寮寮長 高木誠一

焦って、急いで

気が付いたら、頂戴したタイトルどおり四十年を駆け抜けてきたというのが実感です。学生時代からバイブルにしていた本が止揚学園の福井達雨先生の「僕アホやない人間だ」という本です。その本には「障害のある人達は発達が遅く、弱く、いのちが短い。だからのんき、こんき、げんきなんか言っているのはだめだ。福祉の仕事はいのちに間に合うように、焦って、急いでやるべき仕事だ」という内容が書いてありました。今から思うと、福井先生の言葉のとおり焦って、急いでいたのかもしれない。

これまで仕事を続けていて、根洗学園の子どもたちや浜松協働学舎の仲間たちとの悲しい別れがたくさんありました。決して忘れることのできない、私にとってかけがえのない大切な人たちでした。別れのたびに、私よりこんなに若いのに、どうしてこんなに早く人生を終えてしまうのだろうと、その理不尽さを感じ、その都度、私の仕事はまだまだ間に合わないかもしれないあと反省しています。

根洗学園の時代

私は、私の仕事を障害のある人たちが安心してそこにい

ることが出来る場所をつくることだと考えてきました。大学は教育学部美術専攻に入学しましたが、縁あって障害児教育研究会というサークルに入部し、障害児施設に泊まり込んで働いたり、学校に行けない重度の障害児を休日に集めて「一日保育」と呼ぶ居場所づくりの活動をしたりしていました。当時は手をつなぐ親の会を中心に「すべての子に学籍を！」というスローガンを掲げた学籍獲得運動が盛んで、その支援活動にも参加していました。



大学を卒業し、根洗学園に就職したのは一九七六年でした。この年は、それまでの児童部三十名に加え、五十名の幼児部が新設され、定員八十名の大きな施設となり、児童部と幼児部に分かれた運営が行われるようになりました。このとき私が幼児部に配属されていたら、もっと違う人生だったかもしれません。

我が国の障害児教育の歴史は貧しく、すべての子どもが無償で小学校に行けるようになった一九〇〇年（明治三十三年）の学制改革で、実は教育の場から障害児を排除する就学猶予免除制度が発足し、重度障害児は教育の場からはじかれてきました。根洗学園ではようやく一九七五年に小学校、翌年には中学校の学籍が与えられ、地域の小中学校から派遣教員が毎日根洗学園に通い、福祉職員が教員と一緒にたって子供たちを育てるようになりました。

十歳くらいになってから、根洗学園ができたのでようやく家から出て通う場所ができたという子どもたちも多く、集団生活が初めてで、人と一緒に食事をとることができない子どもも多くいました。食事やトイレのトレーニングに明け暮れる毎日、派遣された若い教員たちと、教育とは何か福祉とは何かを熱く論じていました。教員も福祉職も一丸になって教育と福祉を統合していた良い時代だったと懐かしく思います。

一九七九年に県立浜松養護学校（現特別支援学校）が設置され、学齢児は養護学校に移ることになり、根洗学園の児童部はその役割を終えることになりました。根洗学園の構成は、就学前の幼児療育部門と中学卒業後の十五歳から十八歳までの児童部（「高等部」と呼んでいました）となりました。私はこの年齢の高い児童のクラスを担当することになりました。将来大人になって「働く」という生活をイメージして、職員たちが自作でハンガー制作の機械を考案して、作業を中心としたプログラムを実施しました。

根洗学園は児童福祉施設であるために、十八歳を迎えると

卒園しなければならぬ制度でした。浜松市には成人の通所施設ができていましたが、いずれも定員いっぱいまで卒園後の受け皿はどこにもありませんでした。根洗学園ができるまで行き場がなく在宅で過ごしていた人たちが、またも家に引きこもるしかないのか、家族や職員たちは将来への不安ばかり募っていました。

小規模授産所根洗作業所設立

根洗学園では成人の通所施設の設置への要望が高まり、親たちや関係者は市議会などへの陳情を重ねました。しかし、国や県、市の政策は遅れ、念願の通所施設の設置は進まず、いよいよ十八歳を迎えて学園を出ていかなければならない人たちが出てきました。そこで苦肉の策で、無認可の小規模授産所を根洗学園の敷地と建物を借りて設置することになり、一九八三年（昭和五八年）に根洗作業所が設立されました。六人の仲間でのスタートでした。

私は根洗学園から根洗作業所に向かう形で作業所の仕事を行うことになりました。当初は三人の作業所の職員と私の四人で作業所を運営しましたが、根洗学園から養護学校に移った子供たちも再び根洗に戻りたいと学校卒業後の進路として根洗作業所に続々入所して、三年目には作業所は二十名の定員を超えていきました。

一九八七年の春に法人と親の会が話し合い、作業所の新築移転が計画されました。作業所建設のための資金集めが始まりました。後援会を組織したり、寄付金を募ったり、バザーやチャリティコンサートを開いたり、家族と職員が一丸になって福祉作業所建設運動を続けました。根洗学園を間借りしての作業所を運営していた最後の年の一九八八年には、利用者数は三十二人まで膨れ上がっていました。



浜松協働学舎の始まり

多くの人たちの協力や善意で、小規模授産所根洗作業所と重度の障害のある人のデイケア施設の青葉の家を一体的に運営する施設として浜松協働学舎が誕生したのは、一九八九年（平成元年）四月でした。

私は青葉の家の施設長として施設の運営を託されました。どんなに障害が重くても利用を拒まないとした青葉の家には、養護学校を卒業する重度障害のある人たちの希望が殺到しました。開設二年目には、いっぺんに施設が手狭になってしました。そこで、地域のニーズに応えるために一九九三年に第二青葉の家が開設されました。私の仕事場は第二青葉の家に移りました。根洗寮に異動するまでの四年間は、好きな陶芸の活動ができ、夜遅くまでろくろをひいていた楽しい毎日でした。

第二青葉の家へ

第二青葉の家の建設にはとても苦労しました。最初の候補地は立地条件はよかったです、隣接住民の理解が得られませんでした。施設建設に反対され、困っていたところに根洗町自治会の役員の方々が支援の手を差し伸べてくださいました。当時の故荒川自治会長が「反対されてまで他の町に行くことはない。根洗町でおやりなさい。」と、施設の敷地の提供を町内の人々に呼びかけてくださいました。その結果、「どうぞうちの土地を使ってください。」と多数の方からお申し出をいただきました。この時の根洗町の皆様の暖かいご支援があつてこそ、今の浜松協働学舎があるのだと思います。難産の末に誕生した第二青葉の家は、障害のある仲間たちと地域の方々が直接交流できる場所として、陶器のお店やパンのお店には絶えず地域の方々が訪れてくださっています。第二青葉の家ができて二年目の一九九五年に、第二根洗作業所が第二青葉の家の隣に開設されました。浜松協働学舎は四つの小規模施設の複合体となり、利用者数も五十名を超え、職員数も増えていきました。

浜松協働学舎根洗寮へ

親なき後の住まいの場が欲しいという要望から、一九九七年十月に浜松協働学舎根洗寮が開設されました。大きな施設の設立計画でしたが、関係者の知恵が集まって、全室個室・ユニットケアという斬新な入所施設が完成しました。私は第



二青葉の家を引き上げて、根洗寮で施設長の仕事をするようになりました。私自身はそれまで入所施設の運営の経験はなく、ユニットケア・全室個室・職住分離を原則にする、将来は根洗寮のまわりにグループホームを衛星のようにつくって地域生活への移行をすすめるという理想と目標だけは高く掲げたのですが、実際に施設が立ち上がったときは、無断でに施設を出ていく人が続出してハプニングが続き、本当に大変でした。十月のオープンのおとしばらくは、職員はほとんど泊まり込んで支援に従事するという大変さでした。

「暮らし」というものは、支援者だけが気負い込んで動かそうとしても、主役である居住者（利用者）たちがその気にならなければ動くものではないことを思い知らさせられました。利用者はだれも自ら望んで根洗寮に来たわけではなく、「なんでここに住まなければならないのか」というメッセージを無言で訴え続けます。若い職員たちは、その気持ちを受け止めながら、何とか一人ひとりが満足できる暮らしを実現しようと日々考え努力しています。限られた支援者数で夜勤などの交代勤務もあるという入所施設のもつ多くの制約がありながらも、少しでも人間らしい、その人らしい、よい生活をつくろうと努力している職員の姿には、常に頭の下がる思いです。ほんとうに感謝しています。しかし、まだまだ根洗寮の改善や改革すべきことはたくさんあると考えています。

グループホームの始まり

二〇〇〇年には第一号のグループホームであるラポール根洗ができ、根洗寮からの地域生活移行が始まりました。その後も工房めい、工房だん、すてっぷ、ほっぷ、こもれび、ぱれっと、工房ゆう、コムニオ湖東…と、毎年のようにグループホームや通所施設が建設されてきました。建設設置をすすめる度に地域の皆様の深いご理解とご支援

をいただき、町内の街角街角に作業所やグループホームがあり、共生の町に溶け込んで日々の活動や暮らしが営まれています。

人はモノではなく人格として尊重される

故山田修先生は、私たちに「喜ぶ人とともに喜び、泣く人とともに泣きなさい」という聖書のことをひかりの園の理念として残されました。相手の心に常に関心を寄せ、相手の気持ちと共振できるような関わりによってケアができたらどんなに素晴らしいかと思えます。しかし、福祉の世界では、福祉サービスの商品化により、利用者を業務の「対象」「モノ」にしてしまつて、人格的な交わりを忘れてしまつている風潮が広がってきました。人は「モノ」ではなく尊厳ある意思ある人格として尊重されるものです。

一九八三年開設時の小規模授産所根洗作業所のパンフレットには「この世の最大の不幸は、貧しさでも病気でもありません。自分が誰からも必要とされないと感じることです。」とマザーテレサの言葉が紹介されています。障害が重いという理由で学校から福祉施設からも拒否され、行き場のない人たちがそのままの状態では認められ、必要とされ、大切にされる場所こそをつくらうという思いでした。

インクルージョンを目指して

私は、人が住まう場所とは「平和と安心」が何よりも大切だと考えるようになりました。幼くても、高齢であつても、病気があつても、どんなに障害が重くとも、人はみな今というかけがえのない時間を懸命に生きています。いのちが営まれています。私たちの生きている世界は、全てのいのちを受け入れている場であるはずで、人はそのままの状態では尊重されるべきです。私たちが求める「場」とは、そのままを受け入れられ、否定されず、ひとの尊厳を傷つけるなにかから守られるところです。この安心があつて初めて、人は自分が自分を肯定できるのです。

浜松協働学舎のそれぞれの場所が真に「平和と安心」が実現され、その実践をおして私たちが地域に波紋のようにインクルージョンをどれだけ広げることができるのか、これからも追い求めたいと思います。



工房めい

せんべい・ラスク

浜松市北区根洗町 742--5

Tel 053(430)4710

Fax 053(570)2201

工房めいのうすやきせんべいは、味の種類によって3種類の国産小麦2種類とでんぷんと使い分けています。粉を使い分けることによって素材の味を生かしたり、食感に変化を与えたりしています。おススメは、塩チョコとアーモンドです。塩チョコは本来のチョコレート味に岩塩を表面に振って仕上げていますが、甘味と塩味が絶妙なバランスで美味しいです。

皐月堂の人気の商品

- ・アーモンド
- ・キャラメル
- ・ごぼう

アーモンドは、表面にローストしたアーモンドスライスを振って仕上げてあり、食感も楽しめます。
もうひとつ！冬季限定のさつまいも味が、今季限定で安納芋（工房ゆうで収穫）バージョンになっており、おススメです。



責任者 袴田竜太郎



お客様から一言

- ・1袋に色々な種類の詰め合わせがあるといいですね。
- ・バリエーションが多いのが良い。
- ・皐月堂の屋号やキャラクターデザインが可愛い。



青葉の家

陶芸

浜松市北区根洗町 1107-4

Tel 053(439)8235

Fax 053(439)8236



遠州根洗窯

現在、遠州根洗窯では青葉の家と第二青葉の家、二つの窯で製品づくりに取り組んでいます。お皿やコーヒーカップ、花器などをはじめ、干支カレンダーなどの季節を彩るやきものが好評です。ぜひ一度、お店に足を運んでみてください。

ここにしかない、やきものとの出会いがあります。



お客様から一言

- ・家族分が重ねて収納できるともっとたくさん購入できます。
- ・個性的なデザイン。
- ・ネコ展がよかった～。

直営店 手作り陶器・焼きたてパンの店

「しまうま倶楽部」

営業時間 AM10:00～PM5:00 土日祝休み
毎月第二日曜日「陶器市」開催



赤い羽根共同募金助成事業

浜松協働学舎根洗寮

- ・いただいた金額 874,000円
- ・使いみち 「送迎用軽自動車（車椅子スロープ式）1台」

浜松協働学舎根洗寮では、知的に障がいのある方たちが地域で生活するための暮らしの場を提供しています。現在32名の方が生活されていますが、年々高齢化、重度化が進み車椅子を必要とされる方が増えてきました。そのような方々の送迎や通院支援、余暇活動等を車椅子対応の車両を購入したことで、今後も継続することができます。安全で快適な車両に乗って出かけることを皆さんとても楽しみにしており笑顔が増えました。募金をしてくださった多くの皆様の、温かいお気持ちを胸に大切にに使わせていただきます。ありがとうございました。



赤い羽根
共同募金

工房めい

- ・いただいた金額 237,000円
- ・使いみち 「食材保管業務用冷凍冷蔵庫」

工房めいは、障がいのある方達が生活していく為の支援を受ける場所です。障がいを持った方達も充実した生活を送る権利があると考え、職員および施設利用者（障がいをお持ちの方）が力を合わせて活動しています。活動内容は社会参加の一環として、企業からの下請け作業、たまごの洗浄・仕分け・販売、製菓の製造・販売を行っています。今回は助成を受け、製菓作業で使用する業務用の冷凍冷蔵庫を購入させて頂きました。保管場所が増え、作業効率があがり大変助かっております。今後も、障害を持った方たちの仕事と生活の充実を目ざしていきたいと思っております。ありがとうございました。



赤い羽根
共同募金

根洗町の皆様 浜松協働学舎バザーへのご支援・ご協力ありがとうございます

浜松協働学舎では、やきものまつり等のイベントの際にバザーを開催しています。収益は福祉を取り巻く厳しい社会情勢の中、浜松協働学舎の大切な運営資金となっています。地元根洗町の皆様には浜松協働学舎開設当初より地域をあげてバザー品提供のご協力をいただいております。おかげさまで今年もたくさんのバザー品が集まり、大盛況のもとに開催することができました。収益金に関しましては浜松協働学舎を支える会収入に組み入れ、浜松協働学舎の活動に有効に活用させていただきます。これからも浜松協働学舎の活動へのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

災害時物品保存用防災倉庫の設置

浜松協働学舎を支える会から支援を頂き、浜松協働学舎根洗寮に災害時物品保存用倉庫を設置させていただきました。有効に活用させていただきます。
この他、災害時における電力を確保するために、工房ゆうに発電機の設置を検討しています。



グループホームへのスプリンクラー設置

浜松協働学舎では、火災時の対応策として、すでに設置されているコムニオ湖東を除いた各グループホームにスプリンクラーを設置していきます。平成28年度は、ほっぷ・すてっぷ・ぱれっとに、平成29年度以降にはラポール根洗、こもれびに順次設置していきます。

